ECC コンピュータ専門学校　2026 年度第 1 回学校関係者評価委員会 報告書

学校法人山口学園 ECC コンピュータ専門学校 学校関係者評価委員会は、2026 年 9 月 4 日に 2025 年度自己評 価報告書に基づいて学校関係者評価委員会を開催しましたので以下のとおり報告いたします。

学校法人山口学園
ECC コンピュータ専門学校
学校関係者評価委員会

1 開催日時：2026 年 9 月 4 日(金) 18:30～20:00
2 場所：ECC コンピュータ専門学校 (2301 教室)
3 参加者：
○関連業界等関係者　インフォームシステム株式会社　伊藤裕一様（委員長）
○高等学校関係者　高校教員　貴治康夫様
○地域関係者　済美地域社会福祉協議会　中上隆雄様
○保護者　波戸奈緒子様
○学校関係者　校長　納谷新治
副校長・教務課責任者　伊澤幸徳
キャリアセンター責任者　池田宗人
広報課　岸岳澄
教務課副責任者　新古功二、伏浦幸治
教務課　田中統志彦（書記）

2025 年度事業報告（納谷）

別紙 2025 年度事業報告書の内容のとおり。

関係者からご意見をいただきたいテーマについて

大きく分けて以下の 5 つのテーマに関わることついて委員から意見をいただく形で進行しました。

1．卒業生が業界で活躍するために必要な力について
本校卒業生の強み／現場で評価されている能力／今後さらに強化すべき能力／学校教育で重点的に育成すべき資質

2．AI 時代に対応した教育内容について
今後業界で重要になる技術分野／学生に身につけてほしいスキル／生成 AI の活用についての考え方／学校教育に期待すること

3．教員に求められる資質・能力について
専門学校教員に求められる能力／企業経験者が教員となる際に必要なこと／教員研修に期待する内容／学校と企業が連携できる取り組み

4．留学生支援および多様な学生への支援について
留学生に必要な日本語力／就職時に重視される能力／学校に期待する支援内容／多様な学生への配慮について

5．本校の魅力発信と学生募集について
高校生と保護者に伝えるべき本校の魅力／入学前に知りたい情報／学校選択時に重視する点／今後強化すべき広報活動

（今回ご欠席の卒業生・谷様と野間様からの回答はそれぞれ別紙のとおり。）

1．卒業生が業界で活躍するために必要な力について
本校卒業生の強み／現場で評価されている能力／今後さらに強化すべき能力／学校教育で重点的に育成すべき資質

納谷：本日の意見交換テーマとして、卒業生が業界で活躍するために必要な力、AI 時代の教育内容、教員育成、留学生対応、学生募集について議論したい。まずは業界で求められる人材像について意見を伺いたい。

池田：学生の就職状況は概ね良好であり、ほとんどの学生が就職している。ただしゲーム業界は以前より就職のハードルが高くなっている。業界で活躍するためには、技術力だけでなく熱意やコミュニケーション能力も重要である。

伊藤：企業規模によって求める人材は異なるが、中小企業では即戦力が重視される。最近の学生は成果物を作る能力やプレゼン能力は高い。一方で、システムがなぜ動くのか、ネットワークやセキュリティの仕組みなど、本質的な理解が不足している学生が増えている。AI を活用して成果物は作れるが、その中身やプロセスを理解していないことが多い。成果物だけを評価する教育には限界があり、保守性や問題解決能力も重視すべきではないか。業界では育成前提から即戦力重視へ変化しており、基礎力の重要性が高まっている。

２．AI 時代に対応した教育内容について

今後業界で重要になる技術分野／学生に身につけてほしいスキル／生成 AI の活用についての考え方／学校教育に期待すること

新古：AIを使って成果物を作ることは容易になっているが、本質的な理解があるかどうかは企業側には分かる。高校段階からAIを活用する学生が増えており、入学後の基礎教育の重要性が高まっている。なぜその知識が必要なのかを理解させる教育が必要。低学年のうちから基礎や本質を理解させることで、学生の二極化を防ぐことにつながる。

貴治：高校では理科や美術においても生徒が AI を利用する。AI によって優れた成果物を作ることはできるが、生徒自身が技術を習得したと錯覚してしまう場合がある。AI の利用を禁止するのではなく、適切な利用ルールやガイドラインを整備することが重要。高校や大学でも AI 活用を前提とした教育や研修が始まっている。教育現場は AI 技術の進歩への対応に追われている状況である。

伊藤：現在は AI を「作るためのツール」として利用しているが、今後は AI が成果物を評価・検証する役割も担うのではないか。ゲーム業界では既に AI がコードのテストやバグチェックに活用されており、開発効率が向上していると聞く。AI の普及によってプログラマーに求められる役割も変化していくと考えられる。

３．教員に求められる資質・能力について

専門学校教員に求められる能力／企業経験者が教員となる際に必要なこと／教員研修に期待する内容／学校と企業が連携できる取り組み

伊澤：専門学校では実務経験者を教員として採用しているため、業界経験は豊富だが教育経験が少ない教員も多い。専門学校教員に求められる能力や、効果的な研修方法について意見を伺いたい。

貴治：専門知識や実務経験だけでなく、「教える技術」が重要である。高校の情報科教員など教育経験のある教員から指導法を学ぶ機会があってもよい。授業見学や他校教員との情報交換も有効。高校でも教員同士で指導方法を学び合う取り組みを行っている。

伊澤：本校でも授業見学は実施している。今後はさらに、先輩教員が新任教員へ授業運営や指導方法を伝える仕組みを整備したい。教育力向上のための組織的な育成体制を強化したい。

伊藤：昔は先生が教えてみんなが同じことを学んでいたが、今は 20 人の学生がいたら 20 通りの個別指導をできる能力が必要になるのかもしれない。一律での教育が難しくなってきているのではないか。学生の二極化も進んでいるので。

伊澤：留学生の比率が高くなっているのと、日本人も 3～4 割が通信高校出身で、これも対応の仕方が変わることもある。学生の構成比率はずいぶん様変わりしてきた。それに対応できるようにする研修が何かあるのか？と悩んでいる。

波戸：娘が不登校や通信制高校を経て入学した経験から、多様な背景を持つ学生への指導は非常に難しいと感じる。制作授業では、積極的な学生とそうでない学生の差が大きく、チーム制作で負担が偏ることがある。娘もチームメンバーとの温度差に悩み、一時は退学を考えたことがあった。担任教員の介入によって乗り越えることができたが、このような経験は社会に出る前の貴重な学びだと思う。チーム制作をきっかけに学校へ来られなくなる学生はいるのか。また退学者が増える時期はいつ頃なのか伺いたい。

新古：1 年生ではゴールデンウィーク明けが離脱のタイミングになりやすい。新しい環境への緊張が続いた後、長期休暇をきっかけに登校できなくなる。また、チーム制作が始まる時期には相談室の利用者が増加する傾向がある。相談室では悩みを聞くだけではなく、学生自身が考えて解決策を見出せるよう支援している。チーム編成についても、教員が学生の特性を見ながら必要に応じて調整している。

納谷：チーム制作は失敗も含めた経験を通じて、人間力や就職後に必要な協働力を身につけてもらう目的で実施している。一方で、チーム制作をきっかけに精神的負担を抱え、登校できなくなる学生もいる。ゲーム分野では 1 年次後期、IT 分野では 2 年次からのチーム制作開始時期に離脱する学生が増える傾向がある。

４．留学生支援および多様な学生への支援について

留学生に必要な日本語力／就職時に重視される能力／学校に期待する支援内容／多様な学生への配慮について

伏浦：現在の留学生はミャンマー出身者が最も多い。ベトナム出身者は減少し、ネパール・バングラデシュ・スリランカなど南アジア圏の学生が増加している。オープンキャンパスでもこれらの国の学生参加が増えている。日本語能力は、以前は N2 レベルが中心だったが、現在は N3・N4 レベルの学生が増えている。企業は日本語力だけでなく、日本文化や職場文化への理解を重視している印象がある。就職は製造業が好調だが、IT 業界は厳しくなっている。AI の普及もあり、IT 企業は採用をより慎重に行っているように感じる。

中上：地域のボランティアでも留学生に求められるのは日本語力よりもコミュニケーション能力。日本語が多少不自由でも、積極的に会話しようとする学生は周囲から受け入れられやすい。明るく前向きな姿勢が重要。留学生同士だけで固まるのではなく、自ら積極的に日本人と関わろうとする姿勢が望ましい。これは留学生だけでなく日本人学生にも共通する。

納谷：留学生の就職では技術力よりも、日本語力やコミュニケーション能力を重視する企業が多い。特に製造業では、安全確保の観点からも日本語でのコミュニケーションが不可欠である。

５．本校の魅力発信と学生募集について

高校生と保護者に伝えるべき本校の魅力／入学前に知りたい情報／学校選択時に重視する点／今後強化すべき広報活動

新古：通信制高校出身者や合理的配慮を必要とする学生は今後さらに増えていくと考えている。配慮事項については書面で申請してもらい、学校として個別に対応を検討している。専門学校の教育環境上、対応できることとできないことがあるため、その都度調整している。一方で過度な配慮は学生の自立を妨げる可能性もあるため、社会への移行を見据えながら支援を行っている。学生の多様化が年々進んでいると感じている。

波戸：娘は入学当初、満員電車に乗れず通学に苦労していた。学校から遅刻してもよいので登校するようにと言ってもらえたことで、徐々に通学できるようになった。ストレスによる体調不良もあったが、少しずつ克服することができた。過度な配慮ではなく、将来的な自立を見据えた支援が重要だと感じている。ECC コンピュータ専門学校は保護者説明会や体験授業など、配慮が必要な学生とその保護者への対応が充実していると感じた。入学後に経営情報学専攻へ変更できる制度も進学を決める大きな理由だった。自分に合わない場合でも別の専攻へ進める選択肢があることに安心感があった。パソコン中心の授業スタイルも娘に合っており、分からないことをすぐ調べられる環境が学習の助けになっている。

伊藤：学校全体の学生の構成比率としては、留学生や高等課程生徒の割合が今後さらに高まると考えられ、特に留学生の増加に伴う学生の多様化が進むと感じている。日本と海外では文化や価値観、生活習慣の違いがあるため、相互理解を促進するためのガイドのようなものを用意できれば、学生同士や教職員とのコミュニケーションがより円滑になるのではないかと感じた。

以上